

散逸物語『みかきが原』の再検討

— 人間関係を中心に —

『みかきが原』は『風葉和歌集』に四三首^(注)の歌が入集しているが、他には手がかりとなる資料を全く見ない。『風葉和歌集』中の散逸物語の中では歌数が最も多いにもかかわらず、登場人物が多岐にわたり、呼称も紛らわしいために、この物語の復元は非常に困難であり、まとまった考察としては、『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』(小木喬著・昭和四八年二月・笠間書院)・『体系物語文学史 第五卷』(三谷栄一編・一九九一年七月・有精堂出版) 所収の「散佚物語事典——鎌倉時代物語編——」(神野藤昭夫編)・「散佚物語『御垣が原考』——その特質と成立圏——」(新美哲彦・『平安朝文学研究』復刊第八号・平成十一年十一月・平安朝文学研究会) などを数えるのみである。本稿は、先学の考察と重なる部分もあるが、『風葉和歌集』入集歌の熟読再吟味によって、この物語の復元を試みたものである。

以下に引用する『風葉和歌集』の本文は、京都大学図書館蔵本による。また、この考察の前提として、『風葉和歌集』の詠者名はそれぞれ最終的な地位により厳密に区別されているが、詞書中の人名呼称は、その場に応じて相対的に用いられているものとする。

一 皇位継承の順序について

はるの院^(注)のいそぢの御賀に行幸侍けるに、うへに御かは
散逸物語『みかきが原』の再検討

宮田 光

七六 さくら花にはふは春ときゝしかどかゝるみゆきのけふはな
かりき
とらせ給まゝに
後^(注)はるの院の御歌

七七 これぞこのよろづよふべき春ことのさくらをかざす花のみ
ゆきよ
(春下)

春の院の五十賀に、後春の院の、院への行幸があった。「うへ」と呼ばれる後春の院は、当時は帝であり、春の院の皇子と考えられる。入道式部卿親王は恐らく春の院の弟であろう。

やよひの朔日比春院に行幸ありて、花の盛を御覧するに
も、故院の御賀の折おぼしめしいでられければ、よませ
給ける
みかきが原の後春院御歌^(京大本巻)

六〇八 万代とたのみし君は霞にて花こそ春の色はかはらね

御返し
皇太后宮

六〇九 みしおりの花は匂ひもかはらねど人ぞ昔の春となりける

(哀傷)

六〇八番歌詞書に「故院の御賀」とあるのは七六番歌詞書の春の院の五十賀を指し、「行幸」という語から、後春の院の在位中に春の院が崩じたことがわかる。五十賀から余り年の隔たらない頃であろう。

散逸物語『みかきが原』の再検討

この詠者名の「後春院」は、「春院」を校訂した。

六〇九番歌の詠者の「皇太后宮」を後春の院の后とみる説（小木・神野藤）は誤りで、皇太后宮は春の院の后・後春の院の母と考えて、母と子の二人で春の院の死を悲しんでいると読むべきであろう。

きさいの宮、さとおはしましけるころ、うちしぐれたるゆふべにたてまつらせ給ける

みかきがはらの春院御歌

三五五 そむれども木のは、風もさそひけり袖の色こそしぐれわびぬれ

御かへし

皇太后宮

三五六 秋ふかきかことばかりの袖の色にまだき時雨のそらなうらみそ

みそ

(秋下)

この贈答歌からみても、春の院の「きさいの宮」は皇太后宮であるう。

御賀のおり、みかど、しらかはの院などみゆき侍けるに、よませ給ける

みかきがはらの嵯峨院御歌

二四九 君とはでいくよの秋の野べの色露のひかりもこよひこそみれ

(秋上)

嵯峨院の算賀に「みかど」と白河院の行幸があった。この「みかど」は今上帝であろう。帝はこの二人の院と近い関係にある。「君とはでいくよの秋」とあるから、嵯峨院は退位後長い間寂しい境遇にあったのであろう。白河院は嵯峨院の皇子で、嵯峨院に次いで即位した。しかし、その後、皇位は嵯峨院・白河院の系統から離れて嵯峨院の弟と思われる春の院に移り、春の院・後春の院の御代には嵯峨院への行幸はなかった。やっと白河院の皇子（或いは退位後出生の皇子か）である帝が嵯峨院の直系の孫として即位し、行幸したことになる。

春の院と後春の院が続いて即位したと考える理由は、かりに【嵯峨院↓春の院↓白河院↓後春の院↓帝】の順序とすると、春の院の后が皇太后宮と呼ばれていて、帝の后が皇后と中宮では、白河院と後春の院の二代の後宮には中宮或いは皇后が全くいないことになるからである。【嵯峨院↓白河院↓春の院↓後春の院↓帝】の順序でも、後春の院の後宮に中宮がいなかったのはやや不審が残るが、後春の院の皇子がいなかったかも知れないし、治世が短かったのかも知れない。それらを考え合わせると、皇位は【嵯峨院↓白河院↓春の院↓後春の院↓帝】の順に継承されたと思われる。後春の院の、春の院への行幸は、春の院の五十賀と春の院の崩御後の二度で、帝の嵯峨院への行幸はそれより後のことであるから、嵯峨院の算賀は六十賀であろう。

前坊の御ふくたてまつりて、おもひがけずわが御身ひとつにこき御袖のいろも、契あさからずおぼされて

みかきが原の一条女院

六七三 おもひきや涙のかゝるふぢ衣わが身ひとつにそめん物とは

(哀傷)

濃い色の喪服ということとは両親か夫の喪に服することを意味する。ここでは夫。「わが身ひとつ」から、この人には子がいないことが察せられる。子がなくても女院と呼ばれるのは、この人は皇女であろうか。この「前坊」は、嵯峨院・白河院・春の院のいずれかの皇子の可能性がある。いずれにしても、帝位に即く前に死亡したのであろう。後春の院に中宮がいなかったことからすると、後春の院には立坊できる皇子がいなかったと思われるので、前坊は後春の院の皇子ではなからう。

二 皇太后宮・中宮・皇后について

① 前述のように、皇太后宮は春の院の后である。

右大将むまれて侍けるに、ちごのきぬつかはさるとて

みかきが原の皇太后宮

七二五 かすがのゝわか葉のまつやちぎるらん峰の朝日の千代の光

お

おほん返し

一品宮

七二六 ちぎりをく峰のあさ日の光こそ二葉のまつの子代もてらさ

め

(賀)

「春日野」は、奈良の春日神社の辺り。春日神社は藤原氏の氏神であるところから、「かすがのゝわか葉のまつ」は二品宮の産んだ右大将を指し、「峰の朝日の光」は皇室の威光を指す。二品宮の夫は摂関家の有力な人物であろう。登場人物の中で考えれば権大納言か。新生児に産衣を贈った皇太后宮は二品宮の母。藤原氏の繁栄を寿ぐ内容から、皇太后宮は藤原氏出身であり、登場人物の中で考えるとすれば、前左大臣の姉妹であろうか。皇太后宮所生の春の院の御子は、後春の院・一品宮(中宮)・二品宮と思われる。かりに、この一品宮・二品宮を後春の院の皇女とするならば、母親の地位は格が高い筈で、この二人を、中宮または皇后を持たない後春の院の皇女とすることは不適当であろう。

② 中宮一品の宮と申ける時、いでさせ給けるに、しのびて

きこへさせ給ける

みかき原の御門の御歌

八〇八 しのばずはむなしき空も行かたをたがためくゆる下の煙ぞ

(恋一)

中宮のいまだまいらせ給ざりけるころ、忍びてたてまつ
らせたまひける みかきが原の御門の御うた

八二七 つらからば誰が名かおしき命だにあふにしかへば露のためしを
(恋一)

散逸物語『みかきが原』の再検討

二品宮の姉にあたる一品宮は、帝の熱心な求婚により、入内して中宮となった。八〇八番歌の「いでさせ」、八二七番歌の「いまだまいらせ給ざりける」は、一品宮が母皇太后宮の邸に住んでいたことを意味するのであろう。

皇后宮、内にいらせ給て、いでさせ給けるに

おなじ中宮

二七九 もろともに影をならべぬ雲のうへはすむそらもなし秋のよ
の月 (秋上)

この歌から、帝には中宮と皇后宮の二人の后が並んでいたことがわかる。

詞書の解釈は三通り考えられる。

ア、皇后宮が参内し、入れ替わりに中宮が退出する。

イ、中宮が参内し、入れ替わりに皇后宮が退出する。

ウ、皇后宮が参内して、じきに退出する(中宮はずっと宮中にいる)。歌の内容は、アなら「帝とご一緒にできないなら、私は落ち着いて宮中に住む気がしない」、イとウなら「皇后宮とご一緒にできないなら、私は落ち着いて宮中に住む気がしない」ということになる。中宮が参内すると皇后宮が退出する、或いはその逆、という場面は、一条天皇の中宮彰子と皇后定子のような関係を連想させる。アは、むき出しの競争心が出ているので不適当か。しかし、

中宮いでさせ給て、いとひさしうおはしましけるに、き

こへさせたまひける みかきがはらの御かどの御歌

一〇九〇 ほさでまたあきにあはむと思ひきや別し袖の露のふかさを
(恋五)

という歌もあり、中宮が長期にわたって里下がりするということは、入内後の帝と中宮の仲はそれ程良好ではなかったのかも知れない。イ

散逸物語『みかきが原』の再検討

とウのように読むと、中宮は皇后宮を勞っているような関係であろうか。いずれにしても、皇后宮の方が中宮より早く入内していて、中宮であったが、一品宮が入内して中宮となった時に皇后になったと思われる。

③ 中宮が内親王であったところからみて、早く入内した皇后宮（初めは中宮か）は、藤原氏出身と考えられる。前左大臣三君が、帝と逢瀬を持ち、帝を慕いながらも、不本意なことが起こるのを憂慮して姿を隠し、出家して伏見に住み、世を去ったということがあり（後述。三三五・一〇〇五・一〇三二番歌）、臆測ではあるが、皇后宮は、前左大臣の大君の可能性が高い。

また、皇后宮が、本来は先帝の後春の院の中宮であり、今上帝の中宮が決まったときに皇后になった可能性もないわけではないが、御代が替わって、先帝の後が、帝の母でも春宮の母でもないのに、先帝と暮らさずに宮中に残ることはないと思われる。

また、平安時代末から鎌倉時代にかけて、非妻後の皇女が皇后・准母となり、女院と呼ばれる例がいくつも見られる。この皇后宮が嫡妻の皇后ではなく、非妻後の内親王である可能性もあるが、前左大臣三君との関係を重視して、三君の姉と考えたい。

三 前左大臣家の子女

世をそむきてふしみにすみ侍けるに、権大納言、夜ふかき月にたづねまできて侍ければ

みかきが原のさきの左大臣の三君

三三五 身のうさをなげかぬ人もたづねけりふしみのさとの秋のよの月

みかどにほのかに御覽ぜられて侍けるのち、心地かぎり

一〇〇五 になりてよめる みかきがはらの前左大臣三君
のちの世とちぎりしばかりたのまれてたえにしなかの夢のうきはし

（恋四）
みかどにはつかにみえたてまつりて侍ける後、心ならぬ事もありぬべかりけるを思ひわびて、世をそむきて侍けるが、かぎりのさまにさへなりにければ、内わたりにさぶらひける人につかはしける

一〇三二 そむけどもこの世ながらはわすれぬに身をかへてこそなぐさみもせめ

このふみをみかどにみせたてまつるとて

一〇三三 夢にだにしらぬもかなし君にこそわきてかくべきつゆのかごとを

（恋四）

帝の后妃のところに訪れた姉妹を帝が見そめるということは、ありそうな話である。例えば『恋路ゆかしき大将』（巻五）では、藤壺女御を訪れた姉の梅津女君が、帝と関係を持ち、女御は不快に思う。この三君も、そんなことで、帝と僅かな逢瀬を持ったのであろうか。一〇三二番歌詞書の「心ならぬ事もありぬべかりけるを思ひわびて」——不本意な不祥事も起こるかもしれないと憂慮して——というのは、姉である皇后宮を憚ったと考えるべきであらう。一〇〇五番歌のように、来世までもと契りを交わしたものの、その後は帝と逢瀬を持つこともなく、三三五・一〇三二番歌のように、出家して伏見に住んでも帝を忘れられぬまま、世を去った。

帝から三君に贈ったと思われる歌は、

九九二 しのびたる女にたまはせける おなじみかどの御歌
わすられぬ夢だになくはおのづからさむる涙のひまもあら

まし
三君の死を知った、帝の後悔の歌は、

(恋四)

忍て御らんぜられける女の、ゆくゑしられきこへざりけるを、うせぬときこしめしつけらる比、しぐるゝ空をながめおぼしめして
みかきが原の御門御歌

一二三六

しぐれゆく空をかたみと見るよりはなど同じ世をしらす

ぎけん

(雑一)

「忍て御らんぜられける女」は三君。三君の辞世の歌(一〇三二番歌)を預かった「ふちつぼの中納言」は皇后宮に仕える女房か。すると、皇后宮の居所は藤壺か。三二五番歌詞書の権大納言は、三君の兄弟と思われる(注5)参照。皇后宮を大君とすると、『風葉集』に歌は採られていないが、三君の姉にあたる中君がいる筈であり、前左大臣の子女は、権大納言・大君(皇后宮)・中君・三君ということになる。

四 右大将と宮大将

①

いもうとの中宮の御事を思ひて、「かなしきはたれゆへもへしけぶりともしられぬ山にたな引やせん」このうらみをだにいかではるけてしがな」と右大将申侍けるに

みかきがはらの内大臣

八一一

消ぬべきこれは思ひのけぶりとまかひなき空にほのめかせとや
(恋一)

内大臣ものおもはしげなるてならひをみつくて、おもひたへにし中宮の御事を思ひて、そばにかきつけ侍ける

みかきがはらの右大将

九五八

おもひしれこれだにありなみずもあらずみもせぬ恋の下に

散逸物語『みかきが原』の再検討

もへしを

(恋三)

野分の後、おもひまさるゝ事有てよめる

みかきの原の右大将

一二一四

おもひ草さらでもすへのつゆの身をいかにふきつるあき

あらしぞ

(雑二)

八一番歌から、右大将の恋の対象が内大臣の妹の中宮であることがわかる。右大将の「この思いを打ち明けられない恨みだけでも晴らしたい」という言葉に対して、内大臣は、「どうせ消えるしかない思いの火なのに、言っても甲斐がないのに、あなたのことを仄めかせと

いうのですか」と、取り合わない。九五八番歌の「みずもあらずみもせぬ恋」は、女の顔が下簾越しにちらりと見えた、という業平歌(註)を引くので、右大将にも中宮をほのかに見るような機会があったのである。しかし、「おもひたへにし中宮の御事」とあるので、右大将は、この恋を諦めたのであろう。一二一四番歌は、雑一に配されているので、恋のきつかけの歌ではない。むしろ、出家を志している歌かも知れない。「おもひまさるゝ」とあるから、諦めても諦めきれない頃に、野分の紛れに中宮を再び垣間見る機会があったか。右大将が内大臣と親しいのは、伯父でもあり、恋する中宮の兄でもある内大臣に親近感を持っていたからであらう。

とよのあかりの節会に、をみにて侍けるに、まかづとて、あり明の月のおもしろくさへわたれるに

みかきが原の右大将

四一一

めづらしきとよのあかりのひかげぐさかざす袖にも霜はおきけり

まことにおきたりけるにや、うちらはへるけはひおかしかりければ
大納言典侍

四一二

ひかげぐさかざすにいとゞ霜さへてこほりやむせぶ山ある

散逸物語『みかきが原』の再検討

の袖

五せちのころ、大納言典侍のさうしにたちよりて

(冬)

(京大本さうし)
みかきがはらの右大将

一一四八 つれなくてさや山あゐの袖のいろ水れるうへにむすばふれ
つゝ

(恋五)

大納言すけ、うちとけたてまつらぬさまに侍ければ、の
たまはせける

みかきはらの御門御歌

七七七 我ならぬ人にもうとくならはずはかさねてなかの袖もうら
めし

(恋一)

大納言典侍は、右大将の愛人だったと思われる。帝からも言い寄ら
れていたか。

②

野わきのまぎれに皇后をみたてまつりて後、心ちかぎり
になりにければ、中務内侍に遣しける

(京大本)

みかき原の宮大将

一〇九七 みにしみて思ひいづるもかなしきにその秋風の露と消なで

(恋五)

皇后宮にいさゝかちかづきまいりて、さいひしぞかしと
おぼしいでよと、御みゝにきこへをくとして

みかきが原の宮大将

六五九 今はたゞそれかとばかりたなびかんゆふべの雲の空をなが
めよ

(哀傷)

いまはのきはに、あはれなるうたどもかきて、皇后宮に
たてまつらせ給へとて、一品宮にきこへさせ侍ける

みかきがはらの宮大将

一〇四三 涙がはこの世のほかにながれぬと袖よりもらせ水茎のあと

(恋四)

一〇九七番歌によれば、宮大将は、野分の紛れに皇后宮を垣間見た

のであろう。『源氏物語』野分巻の影響か。六五九番歌によれば、そ
の後、どの程度かは分らないが、皇后宮に近づく機会があった。手
引きをしたのは中務内侍か。しかし、思いを遂げるすべもなく、宮大
将は焦がれ死にしてみよう。一〇四三番歌は辞世の歌。この歌を皇后
宮に渡すことを託された「一品宮」は、次の二七八番歌の詠者の前齋
院しか該当者はない。

かものいつきおり給てのち、みかど御たいめんありける
に、月さしいでゝをかしきほどなりければ、

みかきがはらの一品宮

二七八 こよひこそ君が光をさしそへて神世もしらぬ月はすみけれ

(秋上)

部立も秋上であるし、この人は、帝の恋愛の対象になる人ではなさ
そうである。帝よりも年長と思われる。一品宮と呼ばれているので、
嵯峨院の皇女で、宮大将の母の女二宮の姉である可能性が高い。

宮大将の死後、「女二のみこ」に、帝と内大臣から見舞いの歌が寄
せられる。

宮大将みまかりてのち、御かどのしのびてとぶらひのた
まはせたりける御返事に

みかきがはらの女二のみこ

九六一 つれなさのいのちはうきにきへやらであればこの世のなげ
きそひつゝ

(恋三)

内大臣、「みしかともわすれぬ夢をとふ人はなくくす
ぐるうき世なりけり」と聞へて侍けるかへし

みかきが原の女二のみこ

九九一 ながらへてあるだにいのちつれなきをみしかとはんほど

のゆめこそ

(恋四)

九六一・九九一番歌は哀傷に配列されてもおかしくない歌であるが、恋三と恋四に入れられている。これは、恋部に配列されるにふさわしい人間関係が過去にあったことを思わせる。白河院の子である帝と、また、春の院の子である内大臣と恋愛関係があったとすれば、帝或いは内大臣と兄妹(姉弟)であってはならないので、女二宮は、嵯峨院の皇女と考えるべきである。女二宮は、年齢的には宮大将の妻とは考え難く、宮大将の母であろう。

また、「宮大将」という呼称からすれば、父は「宮」と呼ばれる身分であろう。登場人物の中で考えると、兵部卿宮か。兵部卿宮は、白河院の皇子で帝の弟という可能性も、春の院の皇子で後春の院の弟という可能性もないとは言えないが、女二宮の年齢を考えると、恐らく嵯峨院の弟であろう。宮大将が兵部卿宮の子であれば、次の四四六・四四七番歌の、入内を予定していながら俄に齋院に卜定された兵部卿宮女である齋院と兄妹になる。

兵部卿のみこのむすめ、うちにまいるべしときこえける、
にはかにかものいつきにさだまりにければ、をみなへし
にかけてつかはさせ給ける

みかきが原のみかどの御歌

四六六

神がきにさきまじるとも女郎花露ばかりをば思わするな

御かへし

齋院

四六七

ゆふたすきかけても人の忘れずはつゆのなさをたのみこ

そせめ

(神祇)

この齋院の交代は、予期せぬものであったらしい。前齋院が嵯峨院の皇女(一品宮)であったとすれば、嵯峨院の崩御による交代か。帝と齋院の贈答歌はこれだけであり、帝は齋院にそれほど執着している様子はない。

散逸物語『みかきが原』の再検討

五 帝と内大臣

前掲の八一一番歌の詞書に「いもうとの中宮」とあるところから、内大臣は中宮の兄であることがわかる。春の院の皇太后腹の御子は後春の院・一品宮(中宮)・二品宮である。内大臣は、一世の源氏として臣籍に降ったのであるから、后腹ではなく、女御腹であったと思われる。後見役を前左大臣と仮定すれば、詠者名には出ていないが、前左大臣中君と結婚していた可能性もある。八一一番歌(前掲)をみると、中宮に恋している右大将から、この思いを中宮に伝えてほしいと言われても、内大臣は取り合わなかった。九五八番歌(前掲)では、内大臣の物思わしげな手習の歌を右大将に見咎められる。手習歌は他人に見せるものでなく、内心が吐露されるものであるから、それを見た右大将は、内大臣も、自分と同じ相手に思いを寄せていると直感する。「ほら御覧なさい。あなたもいたずら書きですらこんな物思っているじゃありませんか。まして、ちらりと見ただけのあの人への恋が、私の心の中で燦っているのを、分かって下さいよ」というのが、右大将の歌である。

心におもふことをしのびかくすと、みかどのうらみさせ
たまひけるに

七六八

たれにかは物おもふともなか／＼にうきはためしの有る身

ならねば

御返し

みかどの御歌

七六九

うきはためしなからむしたのおもひにも我ばかりこそしり

てこがれめ

(恋一)

帝は、内大臣が物思いを打ち明けてくれないと恨み、内大臣は、「例のない程の、こんな辛い思いを誰に打ち明けられましようか」と

散逸物語『みかきが原』の再検討

返す。内大臣は帝にも誰にも内心を打ち明けない。帝は、「例のない程辛いあなたの秘めた恋だとしても、私だけはそれを知って、あなたと共に思いの火に燃えましょう」と言う。帝は、どうしてこんなに内大臣に執着して、その恋の相手を知りたがるのだろうか。

人しれず御心に物のかなはざりけるころ、よませ給ける

みかきはらの御門の御歌

七七七 かずならぬむかしならでもあやしきはみかきがはらのおも

ひなりけり

かくひとりごたせ給をきゝて、我もあ^(京大本あり)るまじう心づく
しなることを思ひ侍ければ、心のうちに

内大臣

七七八 つむせ^(京大本あり)りのねにだに泣かて朽やせんみかきのはらの下

のうき草

(恋一)

この二首の歌の背景にあるのは所謂「芹摘み説話」^(注8)で、「芹つみしむかしの人も我がごとや心に物はかなはざりけむ」(『俊頼髄脳』二二八八)、「いかにせむ御垣が原に摘む芹のねにのみ泣けど知る人もなき」(『千載集』恋一・六六八・読人不知)などの歌による。「芹摘み」は、卑しい男が美しい后に思い焦がれて芹を摘んで奉るが、何の甲斐もなかったところから、いくら想っても思いを届ける術がないことを言う。「みかきが原」は、本来は大和国の歌枕であるが、「一日、風に誘はれて、御垣の原を分け入りて侍りしに」(『源氏物語』若菜上。柏木が六条院で女三宮を垣間見た場面)のように、宮中や貴人の邸内の庭の意。「芹摘み」と関連づけて叶わぬ恋を詠むことがあった。『狭衣物語』の主人公の狭衣大将は、帝位に即いて、今までと全く違って行動の自由がないことに困惑する。同様に、この「みかきが原」も、宮中というごく限定された空間である。恋の対象も非常に限定されるであろう。内大臣の恋の対象は、「あるまじう心づくしなること」からみて、異

腹の妹の中宮であるらしいが、帝の恋の対象は誰であろうか。

「七七七番詞書に『御心に物のかなはざりける』と否定の過去形で書いていることは、この恋が後に『かなった』ことを意味するから、入内前の中宮を指す」(小木)「『かずならぬむかし』は即位以前の帝を指し、七七七・七七八番歌は同じ人(中宮)を想う歌である」(新美)という説もあるのだが、小木説のように、「ける」だけで、後に望みが叶ったといえる保証はない。新美説も、かりに帝が即位前に逆境にあったとしても、春の院↓後春の院と続いた皇統が途切れたのは、後春の院に立坊できる皇子がいなかったからと考えられる。後春の院の後妃の歌が全くないことからしても、後春の院の治世は余り長くなかったのではないかと考えると、帝は皇位の継承者と目されていた筈であり、たとえ相手が春の院の一品宮としても、実現不可能な恋とは言えない。帝は、中宮・皇后の他にも前左大臣三君・嵯峨院女二宮・大納言典侍と関わりがあったと思われるが、『風葉集』に、帝と中宮の贈答歌は全くない。皇后宮の歌は一首もない。三君は僅かな逢瀬のみで死んでしまう。と見てくると、帝には「あやし」と思うほどの恋をする女性はいなかったかも知れない。すべての歌の詠者を表にしてみたら(表1)、この中で探してみても、恋の対象となる可能性のある女性はいずれも中宮だけで、この人は、歌数からみても、重要人物とは思われない。

七七七・七七八番歌によって、『みかきが原』という物語名がついたと思われるだけに、この二首は、この物語の主題を示していると考えなければならぬ。この二首の間の緊張感、小木・新美説のように同じ人を恋しているところから来るものかもしれないが、別の読み方もあるのではないか。

七七七番歌で、帝は、誰にも打ち明けられない恋心が、思い通りにならなかった頃に、「人数にも入らないようなあの昔話の卑しい男でなくて、帝という地位にいる私でも、この宮中であの人を想う気持ち

【表1】 詠者別歌数一覧（順序は歌番号順。※は詞書中の歌）

詠者 部立	入道式部卿宮	後春院	内大臣	嵯峨院	一品宮	中宮	前左大臣三君	春院	皇太后宮	右大将	大納言典侍	帝	斎院	宮大将	一条女院	二品宮	女二宮	藤壺中納言	計
春下	1	1																	2
夏			1																1
秋上				1	1	1													3
秋下							1	1	1										3
冬										1	1								2
神祇												1	1						2
哀傷		1							1					1	1				4
賀									1							1			2
恋一			3							*1		5							9
恋三										1							1		2
恋四			*1				2					1		1			1	1	7
恋五										1		2		1					4
雑一										1		1							2
計	1	2	5	1	1	1	3	1	3	5	1	10	1	3	1	1	2	1	43

散逸物語『みかきが原』の再検討

は、どうしても理性で制御できない不思議なものだ」と独詠する。帝の歌の「かずならぬむかし」は、引歌の「御垣が原でいくら芹を摘んでも想いを届ける術もなかった、昔の卑しい男」を指していると言わなければならない。帝は、昔の自分のことを言っているのではなく、あの芹摘みの卑しい男とは違って、自分は帝位に即いている、しかし、帝位に即いている私でも、このどうしようもない想いを届ける術がない、と、片恋を嘆いているのである。「あやしき」は、例えば「いつとも恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり」（古今集）恋一・五四六・読人不知）のように、理性では説明できない、どうしようもない心の動きである。大体、七六八・七六九番歌の帝の内大臣への執着ぶりこそ「あやしき」ものではないか。と考えると、七六八・七六九、七七七・七七八の二組の歌の謎が解けるのである。

それを聞きつけた内大臣は、自分も、あつてはならない、ひどく辛い物思いをしていたので、胸の中だけでこう詠んだ。「声に出して泣くこともできずに、この宮中であの方に寄せる私の内心の辛い思いは、摘んだ芹の根がなくて朽ちるのと同じように、浮き草のように朽ちてしまうのでしょうか」。七七八番歌詞書の「我も」は、自分も同じような物思いをしていることを指すが、自分も帝と同じ相手を想っている訳ではない。帝の想っているのは内大臣であるが、彼の想っているのは、帝の中宮である、異腹の妹なのである。故に、彼は帝の思いを受け留めることはできない。この二首の歌が、贈答歌ではなく、それぞれ独詠歌であることも、二人の思いが行き違い、互いに受け留めあえない、孤独感を象徴しているようである。

『風葉和歌集』には、この他に、内大臣と帝の独詠歌が一首ずつある。

ほととぎすのしのびねあらはれてかたらひゐたるこゑも、
夏山にあらねどうらめしうて

散逸物語『みかきが原』の再検討

みかきがはらの内大臣

一五三 心あらばなのらですぎよ時鳥ものおもふとはわれもしらねど (夏)

ものおもほしけるころ、ほたるのとびかふを御覧じて

みかきがはらの御門の御歌

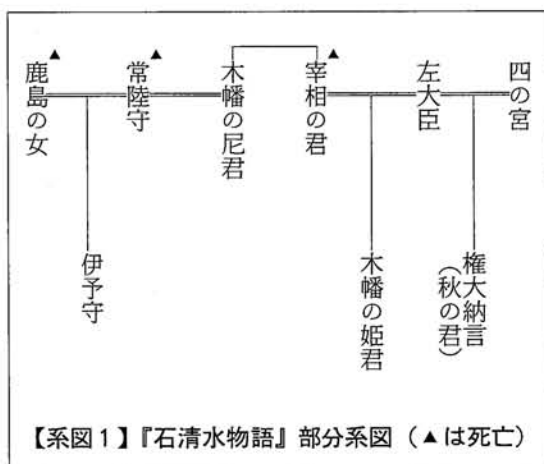
一〇八二 身をかふるひとつおもひの夏むしめいとわればかりこがれやはする (恋五)

どちらの歌もそれぞれの忍ぶ片恋の思いを詠んでいるように思われる。

『源氏物語』にもよく見られる、男性の男性に対する、「女にて見まほし」という表現の延長線上にある男性同士の恋愛は、この時代では、それ程不自然とも思われない。例えば『風葉和歌集』には、『相撲』の右中将と修理亮のような同性愛の歌が収められている。少し成立が下るが、『恋路ゆかしき大将』(巻一)にも、帝の恋路大将への寵愛ぶりが、「けしからぬまでに、世人もやう変はりたる楊貴妃にたとへてぞ申しける」とある。また、(注2)に、春の院・後春の院という呼称が、『石清水物語』の春の君・秋の君という呼称と似ていると述べたが、この「秋の君」と呼ばれる権大納言は、伊予守を寵愛する一方で、異母妹の木幡姫君に恋慕するが、「あるまじきこと」と自制する。ところが、木幡尼君のもとで、姫君と幼時から姉弟のように親しく思ってた伊予守は、春宮への入内を予定している木幡姫君と契ってしまう。その伊予守を見て、権大納言は真相を見抜いてしまう。同じ人に恋しているからである。

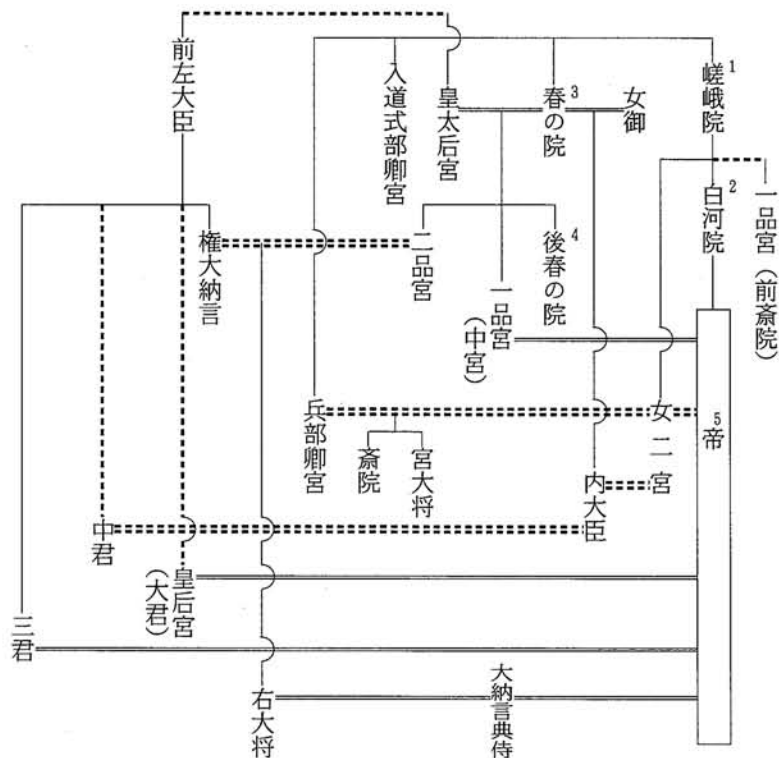
『石清水物語』と『みかきが原』は、どちらも『無名草子』以後、『風葉和歌集』以前の成立と見られ、前後関係は不明であるが、成立時期は近い。『狭衣物語』の疑似兄妹の遂げられぬ恋の描写に影響されつつ、異母兄妹の恋や男性同士の愛の絡み合いを描くという点では、この二つの物語の雰囲気は似通っている。

『みかきが原』の公的な行事の歌は、後春の院の二度の行幸、今上帝の一度の行幸、右大将の産養など、七首しか『風葉和歌集』に採られていない。「晴れ」の歌を重んずる傾向のある『風葉和歌集』に、これだけしか採られていないということは、この物語は、公的な華やかな記事よりも、帝と内大臣、帝と前左大臣三君、内大臣と中宮、右大将と中宮、宮大將と皇后宮などの、宮中という狭い世間の、ままたぬやるせない恋を重視し、主題とする物語であったと思われる。



(注1) 四二三番歌と一〇四四番歌は、それぞれ物語名が書かれず、前歌が『みかきが原』の歌であるため、形式的には同じ物語に属する歌とされるが、物語の展開には関連が少くないと思われるので、ここでは考察の対象としない。その他に八一・九九一番歌の詞書中に各一首の歌があるので、その二首を歌数に加え、計四三首

前坊——一条女院



破線は臆測による人間関係。『風葉和歌集』に登場する人物の中心だけで関係づけているため、破線部については不確定要素が多い。

散逸物語『みかきが原』の再検討

の歌について検討する。また、六〇八番歌の詠者名は、嘉永本の「春宮」以外の諸本すべてが「春の院」とするが、これは「後春の院」の誤りとする。

(注2) この「春の院」「後春の院」というような呼称は実例がない。『源氏物語』の、紫の上を「春の上」と呼んだりする例のように、居所による呼称であらうか。父の春の院の崩後、皇子の後春の院が同じ院に住み、「後春の院」とよばれたのであらうか。やや似た例としては、『石清水物語』に「春の君」「秋の君」と呼ぶ例がある。

(注3) 皇太后宮を後春の院の后とする説は、後春の院に立坊できる皇子がいなかったらしいことから考えて、採らない。

(注4) 京大本の第五卷(秋下)は三十四一番以降の巻末を欠いているので、この二首は陽明文庫甲本によった。

（注5）三三五番歌詞書にある、前左大臣の子息。「権大納言」は詠者名ではないので、後に昇進した可能性もある。

(注6) 郁芳門院媼子内親王・上西門院統子内親王・殷富門院亮子内親王・坊門院範子内親王・春華門院昇子内親王・安嘉門院邦子内親王・式乾門院利子内親王など。

(注7)「見すもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮らさむ」(『古今集』恋一・四七六・業平、『伊勢物語』九九段)

〔注8〕「芹摘み説話」については、「芹摘み説話をめぐって」源氏物語との一接点——（伊藤博・『国語と国文学』一九七〇年一

二月)、『みかきが原』考(檜垣孝・『日本文学研究(大東文化大学)』一九九一年一月)、「歌語『みかきが原』の受容と変遷(湯川直美・『国語国文学研究(熊本大学)』一九九九年三月)などがある。

(注9) 五四一〜五四四・五九六・一一六四番歌など。

散逸物語『みかきが原』の再検討

【付記】『風葉和歌集』は、名古屋国文学研究会によって輪読が進行中である。この稿の一部にもその成果の恩恵を受けている部分もあり、また、意見の異なる部分もあるが、会員諸姉の御寛恕をいただきたい。なお、この稿では、語釈・参考歌などは敢えて最小限にとどめた。研究会の成果は『新注和歌文学叢書・風葉和歌集新注』（青簡舎刊）として刊行中であり（二〇一八年二月 第二冊発行）、詳細はそちらに譲りたい。

○小林幸夫先生に初めてお会いしたのは、本学（当時は短期大学国文学科）御着任の少し前のことであった。本当に楽しそうに情熱的に研究の夢を語られて、この先生になら、国文学科の将来を託せると思った。予想通り、嬉々として研究を進められ、着々と成果を挙げられた。私の退職後も、時々お会いする度に研究の方向などをよく伺った。病状の進んでおられることを全く知らず、急な訃報に愕然とした。残念で仕方がない。ご冥福を祈るばかりである。

合掌